CLOSE UP

昭和女子大生が巡る 北陸新幹線 駅舎建築の世界

福井駅は唐門をイメージした木調ルーバーと恐竜のオブジェが印象的

文：谷平愛莉／千葉優生　写真：中西　優

千葉優生さん　谷平愛莉さん

3月16日に北陸新幹線（金沢・敦賀間）が開業した。開業を前に昭和女子大学 環境デザイン学部 環境デザイン学科で建築デザインを学ぶ2人の女子大生が、福井駅、敦賀駅を訪れた。

鉄道･運輸機構（JRTT）職員案内のもと駅舎を見て驚いたこと、感じたこと、感心したことなどをレポートしていただいた。

いざ、見学に出発

開業前の駅舎を見学するという貴重な体験。出合いを前に私たちの胸は期待で膨らみます。

谷平　米原から特急列車に乗ってきた私たちは最初の見学が福井駅だったため、いったんは敦賀駅を通過しました。特急「しらさぎ」の車窓から見えた新幹線敦賀駅の外観は、予想以上の大きさ。それに圧倒され、早く敦賀駅を見たいという気持ちでいっぱいになりました。

千葉　以前利用したことのある東北新幹線の駅は、冷たいコンクリートのイメージがあり、寂しい気持ちが残る印象。しかし、事前に写真で見ていた北陸新幹線の福井駅と敦賀駅のデザインに対するこだわりには驚きました。それは、それぞれのまちを象徴する他にはない外観と、福井県産のスギ材が至る所に使用された地域の特徴を活かした内観でした。

福井駅

さまざまな県産素材を用いた柵内コンコース

地元の素材を各所に活かした内装に惹かれました。

谷平　福井県産のスギ材を多く使用し茶系統で全体を統一した構内の内装でしたが、改札から少し進んで目に入ったのは笏谷石（しゃくだにいし）のレリーフでした。実物は雑誌や画像で見るのとは色味が異なり、光に照らされとても綺麗。笏谷石はその他のいろいろな所に用いられ、キラキラと輝く様子が開業を祝福しているように思えました。開業後は利用客を明るく迎え入れてくれることでしょう。

福井市の足羽山（あすわやま）で採掘された笏谷石でつくられたレリーフ

福井駅の柵外コンコース。越前和紙を挟み込んだ柱には、恐竜のシルエットがある（右上）

ホーム待合室には笏谷石と県産のスギ材が用いられ、シンプルなデザインでありながら重厚感が感じられる

トップライトにより明るく開放的なプラットホーム

ㅈㅈㅈ…

柵内コンコースからホームへ出る際に利用した階段には、カラーユニバーサルデザインが取り入れられていました。踏面（ふみづら）（※1）と蹴上（けあげ）（※2）が視認しやすい配色になっており、高齢者や弱視者の方も安心して階段を利用できる良い工夫だと感じました。

千葉　柵外コンコースは、越前和紙を使用したやさしい照明の柱や木調ルーバーの天井などにより、穏やかな空間が広がっていました。開業後にここを多くの人が行き交う姿が目に浮かびました。

改札内の男子トイレに案内していただきましたが、パウダールームやベビーチェアなど、私たちが普段利用する女子トイレと変わらない機能があることに好感を持ちました。また、本当に使いたい人が使えるようにと、男子トイレの中に2種類の多目的トイレが設置されていて、使いやすいさまざまな工夫がされていました。

明るく開放的なホーム

ホームに立ってまず感じたのは、その明るさでした。

谷平　積雪地域特有の全覆型ホームですが、トップライトが多様に用いられ、かつホーム上が無柱であるためか、とても明るく開放的な印象を受けました。

千葉　当日の天気は曇りでしたが、ホームはとても明るかったです。それは照明の光だけではなく、駅前広場に面した大きい窓から入る自然光によるもので、これには驚きました。また、福井県産のスギ材が天井や床に使用され、寒さを忘れる暖かい色合いに包み込まれるようなデザインは素敵でした。

谷平　外観のデザインに用いられている唐門をモチーフにしたルーバーがホーム側から見えた時は、外観のデザインを想像し気持ちが高ぶりました。また、実際に近くから見てみるとルーバーの1本1本は太く、力強さを感じました。

千葉　外を眺めると2体の恐竜がハートをつくるオブジェに目を惹かれました。私は恐竜が大好きなので、取材を忘れて、気持ちはワクワク（笑）。駅の至る所に恐竜がデザインされ、恐竜のまち福井をアピールする、子どもから大人まで楽しめる魅力的なスポットでした。

※1　階段の足をのせる板の上面
※2　階段の1段の高さ

取材中はしっかりとメモ

昭和女子大学 環境デザイン学部 環境デザイン学科 田村圭介研究室

2人が所属する田村研究室では、社会の変化に伴い、新たな都市をつくる鉄道の拠点「駅」に焦点を当て、模型製作・研究に取り組んでいる。学生が各駅構内図を収集、現地視察したうえで3Dデータをつくり、それを基に模型を組み上げる。これまで渋谷駅をはじめ、東京駅、新宿駅、山手線全30駅について、展覧会等で発表している。

渋谷駅模型　縮尺1/100

敦賀駅の駅名標前で、ハイポーズ！

❶ JRTT 職員からの説明を受ける　❷県産木材を用いた待合室のベンチを見学
❸安全柵には景勝地などの写真が挟み込まれている

敦賀駅

開業を心待ちにする少年たち

福井駅の見学を終えた私たちは、次に敦賀駅を訪ねました。

谷平　見学の際、開業前には一般の方が入れない新幹線駅構内への出入口から入りましたが、その出入口前に中高生くらいの鉄道ファンの男の子たちが少しでも中を見たいといった様子でカメラを構えている姿が見えました。期待に胸を膨らませ、開業を心待ちにしている地元の方がたくさんいるということを再認識し、私もうれしく感じました。

千葉　跨線橋（こせんきょう）の約 20m の動く歩道には、利用される方の移動時間や負担を減らす目的があります。312m もあるホームにも動く歩道を設置すると、同様に便利ではないかと思っていましたが、ホームにはまちの魅力に触れる写真や船をモチーフにしたデザインの工夫がたくさんあり、利用客にとって、ホームはただ待つだけではなく、楽しめる場所であることに気付きました。

コンコース階の膜天井にびっくり

目が離せなかったのはコンコース階の膜天井でした。

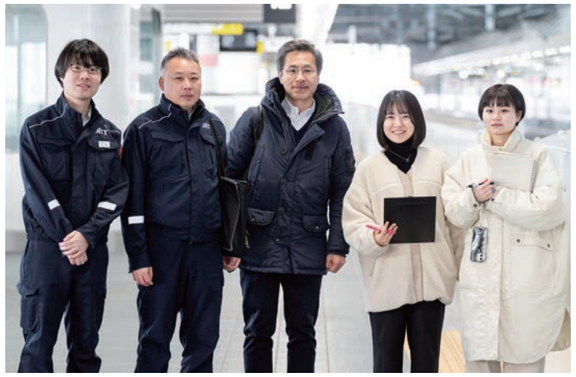
谷平　白を基調とした外観や、ユリカモメをモチーフにした大屋根、四角く形どった窓ガラスや白い壁などを配置し、波を表現した駅舎デザインなど、スタイリッシュかつシンプルで、格好良い印象でした。内装も同じテイストでクールなデザインになっていると予想していたのですが、中は木材が多様に用いられており、船を思わせるデザインも相まってとても温かみのある親しみやすい空間になっていました。

内装のデザインに温かみを感じた理由の１つに、膜天井があります。機能性などの利点があって膜を使用したわけではなく、仕上げ材として膜が採用されたことを知り、デザインした方の大胆さに感心しました。それは北前船の帆を連想させ、その下には柔らかで圧迫感のない空間が広がっていました。

待合室のベンチは港に船を係留するビットをイメージしたデザインでした。実際に座ってみると座り心地が良く、真新しい木の香りがしました。

千葉　膜天井とその下に広がる空間から、昔の海の様子を思い浮かべました。鉄道や貿易の歴史、敦賀まつりなど、昔から今に受け継がれるものなど、柱やサイネージを活用し、表現していました。敦賀のいろいろな表情を知ることができるコンコース空間から、駅全体がまちづくりになっていると感じました。

敦賀駅の後方には敦賀湾が広がる


説明してくれた JRTT 職員と記念撮影

船の甲板に立っているような感覚となったホーム

船の甲板のようなホーム

機能性のみではないホームのデザインに驚きました。

谷平　ホームは全覆型にも関わらず、海風が抜けるような設計になっていました。ホームから敦賀湾を見渡すことができ、加えて木目調のタイルの床や、キャビンに見立てた待合室のデザインにより、船の甲板に立っているような感覚でした。

千葉　ホームを見渡すと、床や待合室の可愛らしいデザインは、まるで船の上にいるような気持ちになりました。見上げると、その骨組みからユリカモメをモチーフにした翼を連想し、大きい翼に包み込まれた力強い気持ちで出発できるような空間だと感じました。

開業記念のトートバックを持ち改札口前で

見学を終えて

短時間の見学でしたが、今後の糧としたいです。

谷平　どちらの駅も県産木材を多用しており、そのデザインは、温かみがあり地元への愛を感じました。今は広くて空っぽのコンコースにも、１週間後には多くの人で埋め尽くされると思うと、とても感慨深く思いました。ホームにも多くの人が行き交い、にぎわう様子が想像でき、開業がさらに楽しみになりました。

千葉　それぞれの地域の特徴や魅力を豊富に取り入れ、住民や観光客がさまざまな用途で利用できる工夫に感動しました。まだ使われていない改札や利用客がいないホームに立っていると、作り手から使い手への思いがストレートに伝わってきました。その時代や暮らしに合わせ、新しい課題と向き合いながら、大切にされる駅になり続けることを願っています。

取材を終えて。お疲れさまでした

教授からひとこと

昭和女子大学 環境デザイン学部 環境デザイン学科
田村圭介 教授

設計・デザインした人々の意図や思想を感じた貴重な体験

普段駅を利用する時、必ずそこには人の動きや電車の音やアナウンスがある。ましてや新幹線の駅となるとなおさらだ。この度、学生２人はオープン前の北陸新幹線の２つの最新の駅である福井駅と敦賀駅を見学した。敦賀駅に至っては整備新幹線の駅舎の中でも最大級の駅だ。オープンまで約１週間前の駅では、無人で無音の状態で、設計・デザインした人々の意図や思想が露わに現れた出来立ての純粋無垢な建築空間を目にすることができた。その時得たものがここにある２人のコメントである。今回の貴重な体験は、いつかこれら駅をまた訪れた時に再認識されるであろう。

［たむら・けいすけ］一級建築士・昭和女子大学 環境デザイン学部 環境デザイン学科教授。1970 年東京生まれ。95 年早稲田大学大学院理工学研究科建設工学（建築）修了。98 年ベルラーヘ・インスティチュート・アムステルダム修了。98 ～ 99 年 UN Studio 勤務。99 ～ 2002 年 FOA ジャパン勤務時に横浜港大さん橋国際客船ターミナル（02 年）の設計・監理を担当した。著書に『迷い迷って渋谷駅』（光文社）、『東京駅「100 年のナゾ」を歩く』（中公新書ラクレ）など。